

# しんせり

第 16 号



1997年2月

日本野鳥の会三重県支部

庭・エサ台にくる鳥

1 はじめに

今年は冬鳥が多く来ています。昨年の冬は冬鳥が激減したため新聞でも取り上げられるほどで大変心配しましたが、探鳥会報告などにもあるとおり、この冬は昨年とは違ってかわって早々と多くの冬鳥が訪れて来ました。ふだんならあまり見られない、オオマシコの情報も各地から寄せられています。

このように、冬鳥の飛来数が年毎に大きく変化する原因はわからないことが多く簡単には言えませんが、1月31日付朝日新聞山田史比古記者の報道によれば、ロシア沿海州での木の実の出来具合が原因の一つではないかということです。当地の研究者の話では、昨年の冬はロシア沿海州一帯では木の実が大豊作で、多くのツグミが南へ渡らずそのまま越冬し、そのあたりの公園でも見られるほどだったということです。

ということであれば、冬鳥の多い今年は北の方で木の実が少ないということなのでしょう。

一方、日本の東北地方では、昨秋からクマガが数多く里に降りて来て、そのため危険だと射殺されるものが全生息数の1割にもあたる500余頭に上ったとして問題

になっています。その原因は山にエサが少ないからです。

この地方でも、山の木の実が少ないことは秋ごろから観察されていたところですが、渡り鳥のツグミだけでなく、アオジやメジロが早くから里や町中で見られたのはみなさんご承知の通りです。こうして考えて見ると、野鳥にとって今年はエサの少ない大変厳しい冬を迎えていると言えそうです。

野鳥を楽しむ方法の一つとして、庭のエサ台に鳥を呼ぶというのがあります。今年はそれが野鳥のエサ不足を補うのに重要な役割を果たすと思われそうです。エサ台は、家に居ながらにしてバードウォッチングを楽しめると同時に、野鳥の住む環境にダメージを与えた‘おわび’としての食物援助という意味もあるのです。

前置が大変長くなってしまいましたが、この度各地区の皆さんにエサ台や庭にくる鳥の様子をお教えいただきましたので、それを今号の特集とします。

目次

今号の表紙 絵：平井正志

特集 庭・エサ台にくる鳥 ----- 2~5

会員のページ ----- 6~7

野鳥講座報告 ----- 8

探鳥地マップ⑧ 真泥池 ----- 9~10

ワホ！ イト野鳥保護④ ----- 11

野鳥情報 ----- 12~13

探鳥会報告 ----- 14~17

支部活動から ----- 17

事務局から ----- 18

ハイイロチュウヒ

Circus cyaneus

昨年末愛知県と合同で開いた木曾岬探鳥会には三重県支部からも多くの方が参加され、午後にはスライドを使ったお話もあって、盛大で有意義なものとなりました。残念ながらその探鳥会時には見られませんが、ハイイロチュウヒは冬の木曾岬・鍋田干拓地を代表する鳥です。

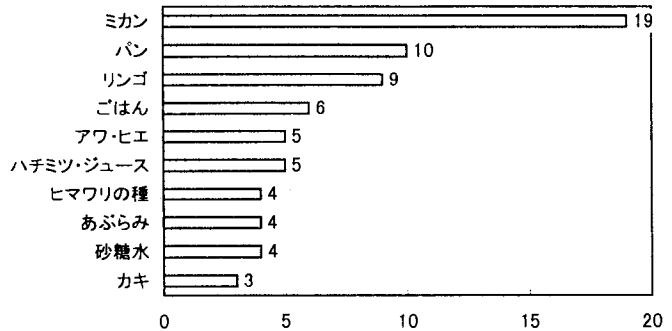
翼や尾が長めに見える中型のタカで、オスは全体が白っぽく翼の先の黒が目立ちます。翼をV字型に広げて干拓地を飛ぶ姿は美しく、カメラマンに追いかけて回されています。

カメラマンの気持ちは解らないでもないですが、自重してもらいたいものですね。

## 2 エサのベストテン

今回エサ台や庭に来る鳥についてお教えいたしたのは、合計31名の会員の皆さんです。エサ台に出しているエサは全部で19種類ありました。そのベストテンはG.1のとおりです。一番多かったエサはミカンで、それ以外にも果物は多く出されています。珍しいものとしてはキーウィ、ドーナツというのがあり、バードケーキを作っている本格派もみえます。一人で9種類ものエサを用意されている方もありました。

G.1 エサのベストテン

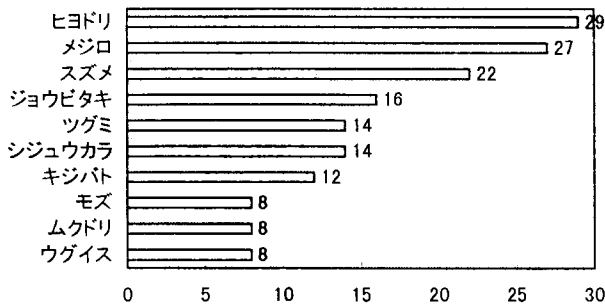


## 3 鳥のベストテン

エサ台や庭に来る鳥で多いのは、ヒヨドリ、メジロ、スズメで、ほとんどの家に来ています。それ以外の鳥では、地域や、その家の環境によって少しずつ違って

いるように思います。例えば、セキレイ類をあげた方は北勢にはありませんでしたが、松阪や南勢では川に近い家の方を中心にかなり出ています。(ハク、セグロ、キの3種合わせると12) また、何故か、ムクドリが来ると答えた方は北勢と松阪だけでした。少数派の鳥にはアカハラや5年前のヒレンジャクというのもありました。

G.2 鳥のベストテン



エサと鳥の関係についてはデータの数が少なく、何を食べているか不明という鳥もあったのであまり参考にはなりません。G.3に示しておきました。少しは傾向らしきものがわかるような気がします。

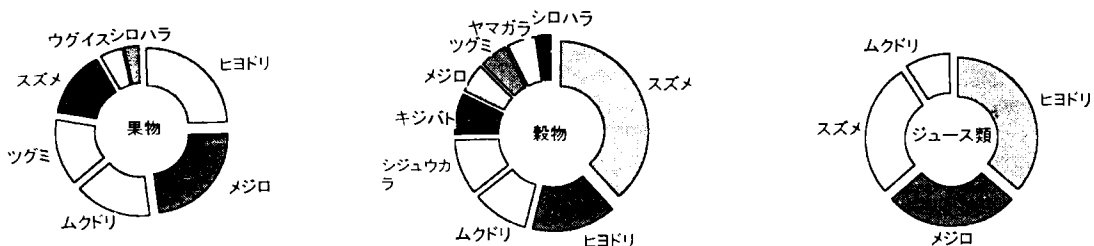


庭に鳥を呼ぶのはなかなか楽しいものです。でも、餌付けの一種ですから野生の鳥に関与して行くこととなりますので、節度も必要です。必要な時、必要なだけ与えるようにしましょう。つまり、秋から冬に、1日1回一度で食べきれる量を、一定期間安定して与えるようにします。ネコにも気を付けるなど驚かさな

ようご注意ください。

この特集、次頁はエサ台や庭に来る鳥についての会員のエッセイです。

なお、今回の特集にあたり情報をお寄せいただいた皆様に厚くお礼申し上げます。(文責：世古口)



G.3 エサ別のやって来る鳥

柿が実るころになると私はハムレット、彼らを中心に一冬を過ごし、時間も心もすっかり盗られてしまうか、それとも長年続いたレストランを閉店するかと迷うのです。

11月になって買い出しに行くかい？と言われると、迷っていたことなどすっかり忘れてすぐその気になってしまうのです。少しずつ柔らかくなっていく柿を冷凍庫にしまいこみながら、寒くなるのを心待ちにいたします。

メジロが餌台のあったところを覗きに来はじめますと、しまい込んでいた餌台の埃をはらい小枝を打ちつけ急いでジュースやミカンを出すと、ずっと来ていたかのように疑うこともなく食べています。もう耳も目も窓の外へ、この冬も仕事はあきらめです。

1月中頃まではメジロが2〜3番い、ヒヨドリも静かに1〜2羽来るぐらいです。この冬一番早く来たヒヨドリはいつものヒヨドリより少し根性があり、メジロにも他のヒヨドリにも絶対に、絶対に、といて近づかせないようにしていました。餌台の止まり木に座り込み近づいて来るスズメやメジロをにらみつけ、頭を低くして少し口を開き羽を小刻みに震わせて、来たら囁むぞ……。茂みの中で見張っていてパチパチパチと嘴を鳴らして飛び出してきて追い払う。朝まだ薄暗い頃から来て、夕方はスズメもメジロも全員が帰るまで頑張っで見張り番をしていました。こんなに頑張るのなら、独りで全部食べるのかと言うとそうでもなく、ただひたすら独り占めすることだけに全精力を傾けているのです。この頑張りヒヨドリについつい笑いを誘われ、

どうなるのかと楽しんでおりました。四日市に25センチの雪が降った日の前日、どっと集まってきた彼らを懸命に追い払っていたようですが、雪の日はもう、かのヒヨドリかどうかは見分けられなくなりました。



一度餌台を見つけた彼らは、どんどん多くなるばかりで強いもの勝ちです。メジロはもう近づくことさえできません。それではと、メジロ用とヒヨドリ用を分け、メジロ用にはヒヨドリが通れない網をはりそれでも潜り込むのをどうしたら入れないようにするか、どの場所ならメジロが安心して食べられるかなどと、いろいろと知恵比べをいたします。

目の前で繰り広げられる鳥たちの世界を、鳥になって眺められること、これが餌台を設ける最大の楽しみです。今年も桜が咲くまで心はすっかり鳥です。

我が家の庭にエサ台を置いたのは20年以上も前のことで、それ以来、毎年冬になるといろいろな鳥たちが庭にやってきました。今年はずずめ、ヒヨドリ、メジロの常連に加え、シロハラ、シジュウカラ（4羽）がほぼ一日中来ています。また、たまにシメとジョウビタキがチラッと顔を出します。周囲の宅地開発が進んだためか、またもっと広い環境変化のためか、来る鳥の種類も数も減ってきていますが、これまで我が家のエサ台で気が付いた話をお届けします。

#### 1. クロジとアオジ

アオジはアワを食べるが決してエサ台には上がらず、地面にこぼれたアワを拾って食べます。ところが同じ

ホオジロの仲間のクロジはアワには見向きもしないで、エサ台に置かれたヒマワリの種を食べていました。

クロジもアオジもかつては常連客でしたが、残念ながら最近では殆ど庭のエサ台には来なくなりました。

#### 2. イカルとシメ

2年程前まで、シメはエサ台の常連客でした。シメはヒマワリの種が大好きで、上手に割って食べます。ある年、近所の農家から大量のくず米をいただき、これをエサ台に置いたところ、キジバトとスズメが少し食べるくらいで、あまり人気がありません。ところがある日、隣のエノキに来ていたイカルの群がエサ台に降

## 特集エッセイ③

ヒヨドリ 加島隆子 (伊勢市)

りてきてくず米を食べていきました。それから毎日、2~30羽のイカルがやって来て、1ヶ月ほどで大量のくず米を平らげてしまいました。

エノキの種子を好んで食べるイカルとシメですが、エサ台での好物が違っているのは面白いことですね。

## 3. アカハラとシロハラ

我が家では生ごみをコンポスト容器で処理していますが、不快な虫が湧くのが悩みの種です。しかし冬、この堆肥を庭に出しておくといろいろな冬鳥がやって来て堆肥の中から虫をほじくり出して食べることが分かりました。特に、アカハラとシロハラはこの堆肥レストランの常連客で、徹底して食べてくれます。不快なうじ虫も、野鳥が喜んで食べてくれると思うと少しは我慢も出来ます。お陰で我が家では、アカハラやシロハラをじっくりと見ることが出来ました。

12月上旬、落葉した柘榴の実に変わった鳥がぶらさがっているぞと主人が呼ぶので、裏窓からのぞくと、羽だけで尾がないまんまるの鳥がいました。しばらくすると電線にとまったのですが、よく見るとどうもヒヨドリの様です。他のヒヨが来ると後を付いて行くのですが、平衡感覚がうまくいかず、またすぐ戻って来ます。そしてこの頃ではメジロやキジバトまで追い払って、梅の木で羽を震わせながら陣取っています。

1月中旬頃にはすっかり尾も生えそろって、モズには追いかけられたりしているが、今日では我が家の庭に住みついて見張り番をしています。

住みついて鴨万両の実を配る (まこと)

## 特集エッセイ④

我が家のクリちゃん

中村みつ子 (志摩町)

昨年の冬のはじまり、我が家の庭にジョウビタキのオスとメスが見られるようになり、縄張り争いのおっかけっこの様子でした。どうやらオスが追い出されたらしく、近くの電線で鳴いているメスは誇らしげに見えました。

シーチキンの空缶にミルワームを入れて待ってみました。二日目ですべて来ました。“ヤッター”……

それからは毎日エサをやるのが楽しみで、エサを求めてやって来るジョウビタキをガラス越しにながめては、日だまりのテーブルから動くことができない日が続きました。

クリクリとした目は大変キュートで愛らしく、キョトンとした様子で周りを警戒しながらエサをついばむのです。なかなかのベッピンさんです。そして尾羽が2枚だけ黒いのです。これも又オシャレな感じでステキです。名前は“クリちゃん”にしました。

かわいくてついついエサの量も多くなりがち、太りすぎは良くないからと気をつけて。私のようにならないといけないから!!

今では私にも大分慣れた様子で、洗濯物を干していてもあまり警戒しなくなり、花畑の回りで遊んでいます。パンジーの花の横にとまるとそのままシャッターチャンスとなり、カメラを持っていない手で“ガシャ!”

ある日、エサをやり忘れて裏庭で洗濯をしていたら、“カッカカッ”とやって来て、“エサを早く早く”と催促します。“ゴメンゴメン”と走る私の先になってエサ缶の方へ飛んで行くので、私もおかしいやら、嬉しいやら。

でも近頃では、この先北へ帰らなければならないクリちゃんが自分でエサを採ることをしなくなってしまったら、私のしていることは常に私の身勝手にすぎないのでないかと不安になっています。春にはちゃんと北へ帰って行ってくれるでしょうか。そして、ちゃんと子育てしていけるでしょうか。

[追伸]

12月のある晴れた一日のこと。

一日のうち何度となくやって来ては柿の木にとまってピーピーとうるさいヒヨドリ。庭の方にはもちろんクリちゃん。そして、ごはんつぶをまいておくと毎日やって来るスズメが13羽。その中に時々しかやらないけどキジバトが1羽。少し離れた所にセグロセキレイが1羽、ハクセキレイが2羽(1羽は幼鳥かと思われる羽の色でした) ツイツイとすました様子で歩いていきます。双眼鏡を取り出して、しばらく家の中からバードウォッチングを楽しむことが出来ました。何となく幸福な一時でした。

翌日には、我が家にはめずらしいお客様、ツグミの姿も見られました。

野鳥だより ～伊勢のレンジャク、ウソ情報～ 林 淳子 (伊勢市)

---ヒレンジャク・キレンジャク---

伊勢にレンジャクが飛来しています。

毎年飛来している五十鈴川沿いのヤドリギの寄生しているケヤキとムクノキに、1月20日ヒレンジャクが20羽余り来ていると鳥仲間から連絡を受け、翌日行ってみると15羽がヤドリギの実を食べていました。キレンジャクも6羽混ざっていました。23日にはヒレンジャク3羽だけでしたが、その後28日まで、数羽から20羽余りが観察されました。ヤドリギの実を食べるとねばねばの糞をするのでヤドリギの種が糸引き納豆みたいな形で木にぶら下がり風に吹かれていました。

2月2日には藤里町で吉居さんが95羽の群を、翌3日には勢田町の鷹泊団地で林が72羽の群を見つけました。どちらの群にもキレンジャクが10羽から15羽混ざっていました。藤里町と鷹泊団地は1km位しか離れていません。多分同一の群が餌の木の实を求めて徘徊しているのでしょう。

鷹泊団地ではピラカンサの実を食べていました。付近のアンテナと電線にその名のごとく、雀のように連なって止まりヒーヒーと鳴き合い、さーと舞い下りて来てはピラカンサの実をついばみ、又さーと電線に戻るといふ行動を繰り返し、1時間余りでピラカンサの実を食べ尽くされました。電線の下には糞が一直線に落ちていました。

伊勢では毎年数羽が観察されますが、キレンジャクはめったに見られません。今年はレンジャクの当たり年でしょうか。

好物のヤツデ、キツタの実はこれからが熟れ時です。実のある所を探してみたいかたでしょう。

---ウ ソ---

今年は山の実りが少ないので鳥たちも里に下りるのが早いようです。ウソも早々と里に姿を現しました。藤里町の吉居さんの観察では昨年12月9日にやすらぎ公園(伊勢市旭町)で初認され、以来ずーっと居ついています。

3羽から10羽位がいつも観察され、サクラの花芽を食べていますが、まだまだ花芽も小さく効率が悪いのでしょうか、セッセッセとついばんでいます。木の下の道路上や側溝には食べカスがびっくりするほど沢山溜まっています。

1月29日には、ウソ♂2♀5アカウソ♂3が、2月7日には、ウソ♂4♀6アカウソ♂1が観察されあちらの枝こちらの枝と花芽を食べていました。

毎年どこかでウソによる果実の被害が伝えられますが、今年のやすらぎ公園の桜の開花はどの位になるのでしょうか。興味のあるところですよ。



カイガラムシとシジュウカラとタカ

シジュウカラの働きぶりと自然の厳しさを見続けられた鳥羽の富岡さんご夫妻感動のお話です。

昨年の11月11日、伊勢市朝熊町にある県営サンアリーナに行ったときのこと。植込みのナンキンハゼなど数十本の落葉樹には、もち花をつけたように真っ白なカイガラムシが多数付いており、手のほどこしょうが無いような状態でした。気になってその後何度か行って見ましたが、行くとカイガラムシが減っていました。実は、十数羽のシジュウカラがやって来て、次々にカイガラムシを食べていたのです。

ところが11月29日に同じ場所に行くと、そのシジュウカラを狙って1羽のタカがやって来ました。タカは高

い樹に止まってチャンスを待っています。「あ～、やられる！」と思ったとき、1羽のセグロセキレイが道路ぎわに降りてきました。タカは一瞬のうちに、そのセキレイをさらって行ってしまい、シジュウカラは無事でした。

そして、今年の1月8日には、カイガラムシは殆ど目につかない状態になっていました。シジュウカラ君、まことにごくろうさん！と言いたい気持ちでした。

祝祭博のために開発された朝熊山麓に、新たな生態系が作られつつあります。けれど、ブルドーザが入るまでは、もっと多彩で多様な生きものたちのにぎわいがあったことを忘れてはいけないと思います。

(文責 吉居瑞穂)

五十鈴公園探鳥会に参加して

山田 昭子 (伊勢市)

日曜探鳥会に初めて参加しようと思った12月1日は、朝から風が強く、とても寒い日でした。一人だったので少し迷っていましたが、集合場所に行ってみると、「お伊勢さんマラソン」の日で、出場する人たちが大勢（ランニング姿の人もいて）元気よく集まって来ているのを見て、元気づけられました。

「参加して本当によかった!」と思ったのは、多くの鳥達を見る事ができたことです。（鳥を見ている間だけは寒さを忘れられました。）カワセミ、イワツバメ、コゲラ、カイツブリ、ツグミ、ハイタカ等々、次から次へと現れてくれて、全部で34種もの姿に約2時間程で出会えました。

私は、初めて探鳥会に参加してからまだ半年、まして双眼鏡を手に入れたのはほんの1、2ヶ月前。肉眼で見えても、レンズの中にはまったく入らないという状態です。でも今回、多くの鳥達がそんな私のために（?）同じ木、同じ場所にずっといてくれたので、今まで見られなかった、かわいらしいエナガ、シジュウカラなどの姿もしっかり見ることができました。カワセミはTVのCMと同じなのです。（逆ですよ。）でも、実際に実物に会える、生で見られる、感じられる、というのは本当にうれしいことです。自然の不思議さ、神秘さ、そして「生きているってすてきだ!」と感ずることができた時間でした。

「フィールド・ノートより」冬編

矢田 栄史 (菰野町)

- ・12月16日 オオマシコ (♂1, ♀1) 菰野町三重用水調整池  
斜面で草の実をついばんでいました。♂の頭とノドの白い斑点が印象的でした。
- ・12月8日 カケス 菰野町三滝川ぞいのマツの木「ビッキー」とサシバと思われる鳴きまね一声。
- ・12月10日 ミヤマホオジロ (♂1) 菰野町三滝川周辺ヒバリのような声でさえずって(?)いました。
- ・12月18日 ジョウビタキ (♂) 菰野町三滝川河川敷ペリットを数回吐き出す。12月26日も同様。スコープで見ていると、ウゲゲゲという感じでやや苦しそうでした。
- ・1月15日 ウソ (♂5) 初認。菰野町三重県民の森サクラの若芽をついばんでいます。
- ・1月18日 ウソ (♂1, ♀1) 菰野町三重県民の森ルリビタキ (♂1)

上記以外では、県民の森でリスが地上でマツカサを食べるところを最初から最後まで見ました。（約3分間）付近にはしんだだけのこったマツカサが多数落ちています。

三滝川は、私が行くあたりは伏流になっていて、ふだんは水が流れていません。周辺にはジョギングコースがあり、川原にも犬の散歩をする人、ジョギングする人が多数います。スコープをかっついていると何人かの人に声をかけられます。そんな人と話をするのも楽しみのひとつですが、なかには家でメジロを飼っているとか、ウグイスが正月ごろから鳴き始めたという人もいて、苦笑することもあります。また、元野鳥の会員という方が、以前はこの周辺でもカルガモが繁殖していたことも教えていただきました。

いつまでも、野鳥をはじめ、生き物たちがくらしやすい環境であって欲しいと願います。

(1997.1.22 大雪の日)

俳句

冬の鳥

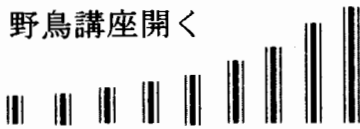
坂口 守 (鈴鹿市)

河原鶉鳴き声風に乗せてくる  
冬耕の畝狙ひおり冬の鶯  
鴛鴦の夫唱婦随や水尾一つ  
千里来て鴨睦まじく嘴触合ふ

黄鶺鴒番構成出来た飛び  
一声、二声愛確めて鶴翔ける  
(出水にて)  
渚にて手を拍てば舞う冬鶉

佇めば鶯鳴き近く近く来し  
吹雪くなか梅に来てをり頭高  
残雪を踏む探鳥や懸業とぶ  
電柱にだまり込んでいる寒鶉

野鳥講座開く



「安濃川・志登茂川河口の環境と野鳥」

講師：木村裕之研究部長



1月26日津市のサンワーク津で野鳥講座を開催しました。この日は午前中安濃川河口探鳥会が開かれ、それに引き続く形での講座で、内容も安濃川・志登茂川河口の野鳥や環境についての木村研究部長のお話となりました。

参加者は14名で少しさみしかったです。木村さんの熱心な研究の成果がスライドも交えて披露され大変充実した講座であったと思います。

今回この講座に参加された坂口さんに、この日の様子を報告していただきました。

野鳥講座を受講して

坂口 守 (鈴鹿市)



ウミアイサ 1/26 守鹿市

1月26日、安濃川河口探鳥会に初めて参加した。北風は寒かったが快晴に恵まれ、鳥合せの集計は、39種。私には未確認の種も若干あったが、半日のウォッチングとしては収穫ある探鳥会であった。

この探鳥会、志登茂川河口が主体であるのに安濃川と説明されているのが、些か疑問に感じたのは私だけでしょうか。

探鳥会のあと車に便乗させて戴き、暖かい昼食を皆さんと楽しく雑談、元気を回復した。

午後、サンワーク津会議室にて、研究部長木村裕之さんの野鳥講座「安濃川・志登茂川河口の環境と野鳥」と題しての研究発表を受講する。木村さんが大学生時代自然観察会員として、1976・3～1979・10の3年半の長期に亘り志登茂川西浜橋から、志登茂川右岸を河口まで、さらに安濃川左岸を塔世橋までやく5軒余り毎月何回か観察された貴重な記録から、特に渡来野鳥の推移について説明を聞く。調査野鳥種別約120種、カウント個体数は約85,000。

この20年間に野鳥の飛来種類に大きな変化があることを指摘された。資料によると、増えていると考えられる種はカムリカイツブリ等10種、特にカモ類が多く、日本野鳥の会三重県支部が行っているガンカモ科調査と比較しても顕著に表れている。減ったと考えられる種はカイツブリ他10種、中でもオオミズナギドリ、トビが印象的である。オオミズナギドリは、京都の冠島で繁殖し、琵琶湖、伊勢湾を通過して南方海域で越冬するのだが、多いときは何千羽も飛来していた。バランスの悪い鳥で飛び立つことがむづかしい。市内でもよく事故にあっている個体を見かけた。木村部長の経験談に耳をかたむける。

この個体数の経年による変化こそ、周辺環境変化を

反映している要因の一つではなからうか。

それでは環境がどのように変わったか。20数年前の周辺の地図と、当時のスライドにより環境状況の説明を聞く。志登茂川沿いには各所に養魚場が散在していたが、都市開発と河川改修、ヘドロ浚渫等により養魚場は殆ど埋められた。又、河口付近の干潟も少なくなった。処々に松林があり野鳥の埒となっていたがいまはその面影もない。

さらに、干潟底生動物定量調査や、養魚池周辺の植生調査から、水系の富栄養化、ゴミによる土壌の変化により植生に変化が生じ渡来する野鳥種類に影響を与えているのではないかと説明される。

20年間に、このように野鳥渡来の変化が生じたのは、環境変化ばかりが原因ではないにしても、私達、野鳥を通じて自然に親しみ自然を守りたいものにとっては、無謀な環境変化（地域開発等）生態系のサイクル破壊が強いては、人間存亡をも揺るがすことになる警告であると思える。

この貴重な資料を基に今後追跡調査が行われ、どのような経緯を辿るのか興味がある。私達は、常に野鳥のみならず、自然環境全体の問題として、住みよい地球環境の維持を計りたい。本日の講座をお聞きして思いを新たにしたい次第である。

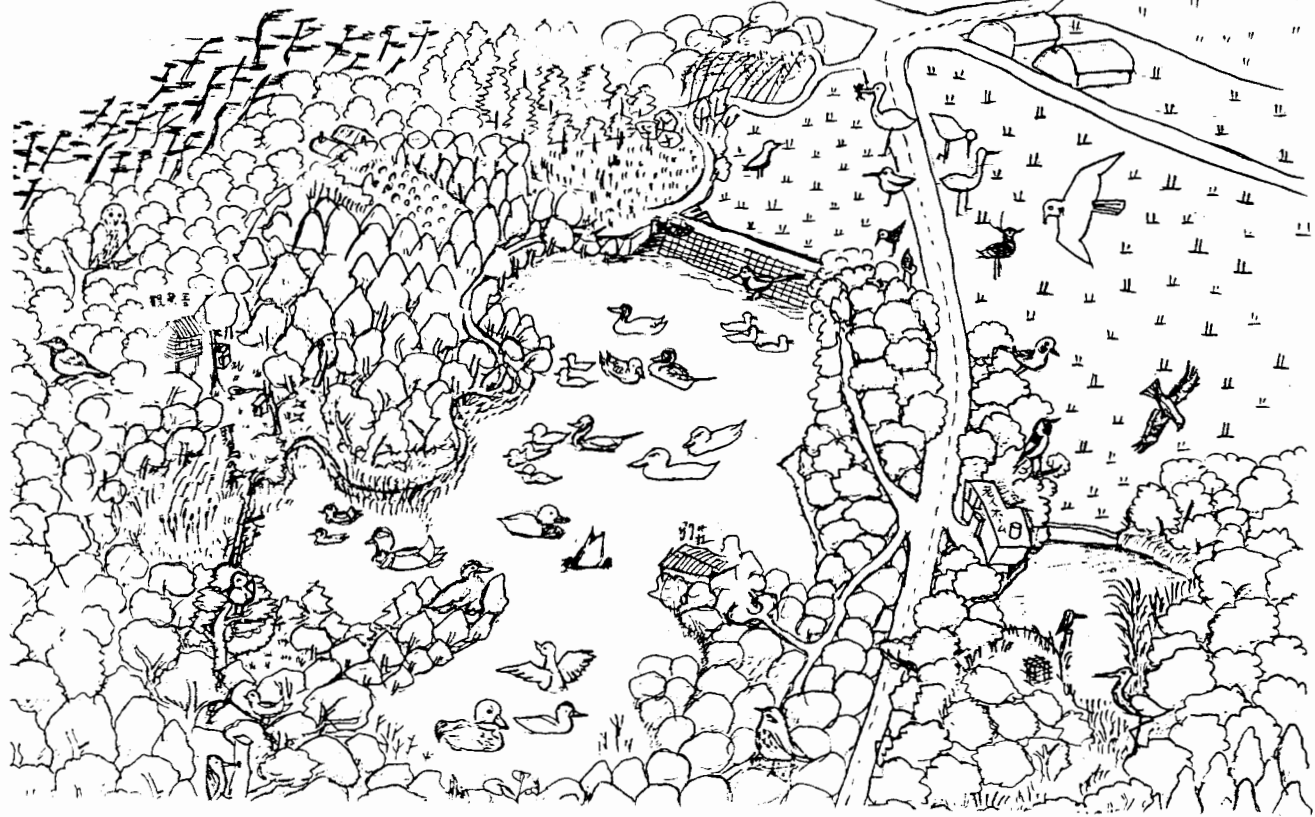
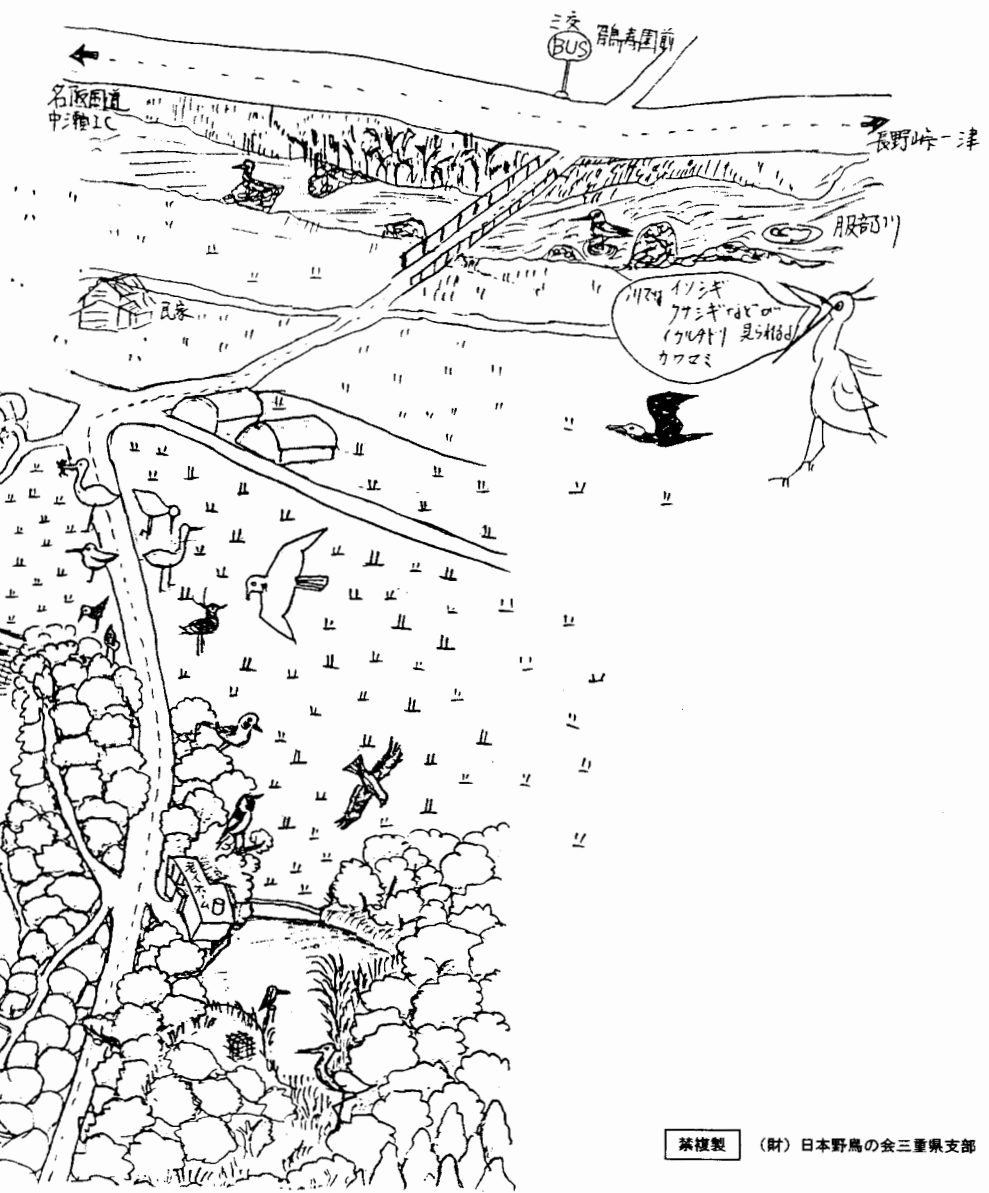
それにつけても、最近のニュースに、北陸でレンジャク数十羽が二度に亘り集団死したと報じられた。原因は不明とか。又、ロシア船籍タンカー沈没事故で多くの海鳥が犠牲となっている。文明が乱す生態破壊である。海国日本、事故発生に即応する体制の不備も嘆かわしく思うものである。



探鳥地マップ (8)

# 真泥池

所在地 阿山郡大山田村真泥  
時期 11月下旬～2月



茶植製 (財) 日本野鳥の会三重県支部

カモの多いため池

## 真泥池 みどろいけ

三重交通バス 上野産業会館から大山田村方面行きに乗車、鶴寿園前下車  
徒歩10分、 駐車場、路上に駐車可能

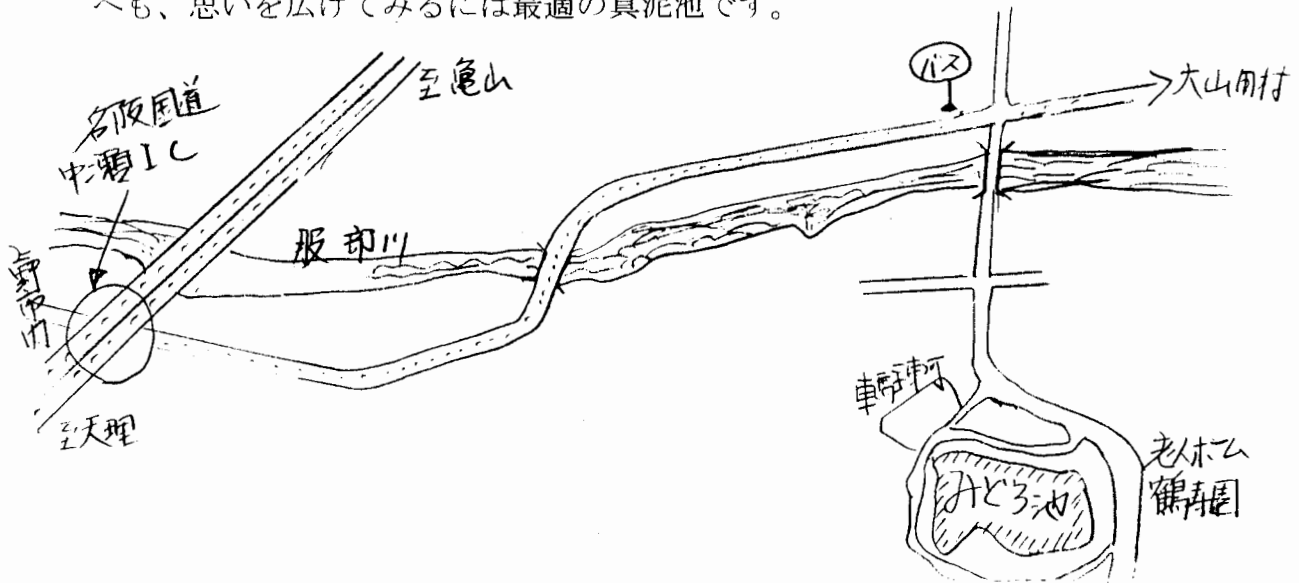
真泥池は、赤松林に囲まれた林の中の谷をせき止めて、農業用のため池として作られました。4ヘクタールほどの池です。冬になるとカモ類が多く渡ってきます。主なメンバーは、カルガモ、マガモです。それらに混じって、コガモ、オナガガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、などのカモが観察されます。

かつては水没した灌木の中にオシドリの姿が見え隠れしたのですが、水没灌木が朽ちて来るに伴って、オシドリの数が減少してきたように思います。ここ2・3年ほとんど見られなくなってしまいました。

そこで、水辺にドングリの苗木などを植えて、オシドリを呼び戻そうと、いろいろと対策を練ってきました。残念ながら、今のところ、その対策は有効に働いていませんが・・・近い将来には、かつては50羽以上もいたオシドリの姿を呼び戻したいと考えています。

池の西側の奥に大山田村が管理している野鳥の森があります。地元の中さんというおじいさんが森番をしてくれています。餌台にはホオジロやカシラダカキジバトなどがやってきて、冬場の餌不足を補っています。中さんは、お酒が好きで、真泥池へ行くときは、ワンカップとするめを持って行って、中さんと小屋で一杯やるのもいいですよ。

三重交通鶴寿園前のバス停の前の服部川では、セキレイ類、イソシギ、クサシギ、イカルチドリ、サギ類、などが見られます。川の泥岩の中には、巻き貝などの化石がたくさん入っています。専門家によると、古代ワニや河イルカなどの化石も見つかるそうです。この少し上流で、アカシゾウや古代ワニの足跡化石が発見されました。現世鳥類だけではなく、古生物へも、思いを広げてみるには最適の真泥池です。



## ワンポイント野鳥保護④

## 傷病鳥の救護・その3

3号にわたった「傷病鳥の救護」ですが今回が最終回で、救護の最終局面である保護飼養中の給餌と放鳥について説明します。

## 1 保護飼養中の給餌

野鳥は保護された時はおびえていますので、なかなか自分から餌を食べようとしません。しかし、そのままでは弱ってしまいますので、そのような時はくちばしをこじ開けてでも餌を与える必要があります。これは、前号述べた応急の給餌と同じ要領となります。指でくちばしにぬったり、スポイトや、すり餌なら竹べらを使ったりして、自分から食べるようになるまで根気よく続けます。そうして自分から食べるようになれば一安心です。

このような保護飼養をしている時、何を食べさせればいいのか。自然の中での生活と同じ物を与えるのが一番いいのですがそういうわけにもいきません。例えばたいていの小鳥類のヒナは昆虫を食べていますが、かなりの量を食べますので採集してくるのは大変です。こういう時は、小鳥店で売っている「ミールワーム」を使うのです。他にも釣具店で売っている魚釣り用のエサ（ササ虫、ヨモギ虫、ミミズなど）を使うこともできます。（いずれもあまり行きたくない店ですが）

昆虫の代りにはすり餌も使います。これは青菜をすったものに穀物や淡水魚の粉を混ぜ水で練ったものですが、小鳥店で配合した粉を売っています。応急的にはもっと簡単なものとして、パンやビスケットを牛乳で柔らかくして与えることもできます。

具体的にどんな鳥にどんな餌を与えるかは、普段の野鳥観察の成果を発揮しましょう。自然の中での餌と同じか近いものを食べさせればいいのです。例えば、サギ類は魚やカエルを食べていますから、小魚や魚肉を与えます。生肉も使えます。ウグイス類やカラ類は昆虫食ですから代用としてすり餌を使います。（果物もふだん食べていますからもちろんOKです。）でも、ツバメ類には生きた昆虫がよいのです。ホオジロ類やアトリ類は種子をよく食べていますから、アワやヒエを与えましょう。

与える時の注意としては、すり餌はいたみやすいのでその都度作ります。冷蔵しておく時は冷えたまま与

えないようにします。それと小魚を与える時は頭の方から飲ませるよう注意してください。これはカワセミの採餌をよく見ていたらわかることですね。

給餌回数は、小鳥なら1～2時間中型の鳥は2～3時間に1回、大型の鳥は1日2回位です。

## 2 放鳥

保護飼養をしていた鳥が回復し、自然の中で生活できるようにになれば放鳥します。

野鳥は多種多様な環境で生息していますし、渡りもありますので、それぞれの鳥に合った場所と季節に放す必要があります。例えば、アジサシ類でしたら夏、海岸や河口で放します。ヒバリ類なら開けた耕地に放せばよく季節は問いません。要するに、いつ、どこに、どんな環境に鳥がいるかを思い起こせばよいのです。

放鳥時の注意としては、日没後に放鳥するフクロウ類をのぞけば、一般的に穏やかな天候の日の午前中に放鳥することや、すぐに飛べない場合もありますから、ネコなどの外敵に気をつけるようにします。放す時は空中に放り投げたりせず、静かに箱を開けて自分で飛んでいくようにさせましょう。

元気に飛んで行ったなら、これでその傷病鳥に対するあなたの役割は終わりです。

## 3 最後に

これまで3回にわたって傷病鳥の救護について述べてきました。まとめとして言えることは、普段私達が行っている野鳥観察が、傷ついた鳥を救うのに大変役立つということです。つまり、野鳥がどんな姿をしており、いつ、何処でどんな行動をしているのか、何を食べているのかをよく観察していることによって、野鳥が傷ついているどうか、どう扱えばいいのか、どんな餌を与えたらいいのか、どう放せばいいのかということなどが理解できるのです。もちろん専門家に任せなければいけない場合もありますが、私達の楽しみである野鳥観察を生かして野鳥を救うことができるなら、野鳥の会会員として幸せなことと思います。

（このシリーズの文責：編集部・世古口）

参考図書：「野鳥のためのりりーふガイド」

（大阪府農林水産部）

## シギ・チドリ類 1996年秋の観察報告

多田弘一 (嬉野町)

筆者は1996年春、探鳥歴2年目の初心者であったが、日本湿地ネットワーク・シギチドリ委員会の趣旨に賛同し、厚かましくもシギ・チドリ全国カウント調査に参加した。その責任上、観察には熱が入り、種の識別には更なる慎重を期した。

主たる観察場所は、いつもの通り雲出川河口から三渡川河口の三雲町の海辺とその後背地及び松阪市の愛宕川・金剛川合流部から櫛田川河口が形成する広大な干潟とその後背地であった。この報告の最終観察日は1996年12月29日である。

本誌第14号に報告した春の調査終了後も観察を継続した結果、三渡川河口を居場所とする★チュウシャクシギ16の群と行動を共にする★オオソリハシシギ2の越夏及び碧川河口突堤を居場所とした★キアシシギ6の越夏を確認した。

シギ・チドリ類の越冬地での越夏の報告例は海外文献で多く見られるが、渡り途中の本邦での越夏記録は、筆者の調べた範囲内では少ない。越夏が珍しい事なのか、普通の出来事なのかは記録報告が少ないので不明であるが、本部研究センターに於いて公式記録と認定されたのは、大切な記録と判断された故だろうか？

今後も、春と秋の中間期（6月下旬～7月上旬）を慎重に観察し、越夏するシギ・チドリ類の状況を観察したい。

7月中旬にもなると、チュウシャク、キアシは急速に数を増し、越夏組と合流してシギ・チドリ類の秋のシーズンが早くも幕を開ける。

しかし、オオソリハシシギの飛来は遅く、1ヶ月遅れの8月下旬であった。9月7日三雲町曽原海岸での45羽が、オオソリハシシギの最多確認数でチュウシャクシギ44羽と行動を共にしていた。

別表に、初認日と最終観察日をまとめたが、種名は飛来順に並べた。最多観察日を記すと飛来の最盛期が良く分かるが、シギ・チドリ委員会発行の全国カウント報告書を参照して載きたい。

7月中旬、三雲町曽原の水を張った休耕田にセイタカシギ3羽が飛来し、当初はケリの群に手荒い攻撃を受けた。その後、落ち着いて充分な栄養補給を行って飛び去った。滞在12日間の内、9日観察できたので多くの記録写真が撮れ、その習性をゆっくり観察した。

セイタカシギ3羽同時飛来は、当地では珍しい事だと思う。この頃、コチドリも大群を形成し、当地で繁殖した個体と移動してきた個体が合流するらしい。

春は少ないタカブシギの数も、秋は非常に多い。

タマシギは7月中旬に突如姿を現し、その後日毎に数を増し、8月には雛さえ見られる。

	初 認 日	最 終 確 認 日
コチドリ	繁殖多数 三雲町曽原、五主	9/29 4 三雲町曽原
チュウシャクシギ	越夏 16 三雲町喜多村新田	10/15 1 三雲町五主
オオソリハシシギ	越夏 2 三雲町喜多村新田	10/20 3 松阪市高須町
キアシシギ	越夏 6 三雲町五主	10/24 1 三雲町五主
セイタカシギ	7/15 3 三雲町曽原	7/26 3 三雲町曽原
アオアシシギ	7/15 2 三雲町曽原	12/26 2 三雲町曽原
タカブシギ	7/16 3 三雲町曽原	10/06 1 松阪市高須町
ソリハシシギ	7/18 5 松阪市高須町	10/31 3 松阪市高須町
ヒバリシギ	7/18 1 三雲町曽原	9/21 1 三雲町曽原
タマシギ	7/18 2 三雲町曽原	9/04 2 三雲町曽原
ダイゼン	7/25 1 松阪市高須町	12/29 15 三雲町五主
オオジシギ	7/25 1 三雲町曽原	9/19 5 松阪市高須町
クサシギ	7/29 2 嬉野町津屋城	12/26 1 嬉野町島田
ムナグロ	8/02 3 三雲町星合	9/14 3 一志町其村
オオキアシシギ	8/02 1 三雲町星合	8/02 1 三雲町星合
メダイチドリ	8/03 1 三雲町星合	10/17 6 松阪市高須町
ホウロクシギ	8/03 1 三雲町五主	9/11 1 三雲町喜多村新田
コアアシシギ	8/04 1 三雲町曽原	12/26 2 三雲町曽原
キョウジョシギ	8/07 5 三雲町五主	9/07 2 三雲町五主
ハマシギ	8/08 32 三雲町五主	12/26 多数 松阪市高須町
タシギ	8/08 3 三雲町曽原	12/29 5 松阪市高須町
オバシギ	8/16 5 松阪市高須町	12/29 夏羽1 三雲町五主
トウネン	8/17 8 三雲町五主	10/17 2 三雲町五主
オグロシギ	8/21 1 三雲町五主	9/07 1 三雲町五主
オジロトウネン	8/21 3 三雲町曽原	9/24 1 三雲町曽原
コオバシギ	8/22 1 松阪市高須町	10/13 1 三雲町五主
アカエリヒレアシシギ	8/26 1 三雲町五主	9/08 1 松阪市高須町
ウズラシギ	9/01 1 一志町高野	9/08 1 松阪市高須町
エリマキシギ♂	9/03 1 三雲町五主	12/15 1 三雲町曽原
ダイシャクシギ	9/03 2 三雲町五主	9/05 2 松阪市高須町
キリアイ	9/04 2 三雲町星合	9/18 1 三雲町曽原
エリマキシギ♀	9/05 5 松阪市高須町	9/10 1 松阪市高須町
ミヤコドリ	9/29 2 三雲町五主	12/29 3 三雲町五主
タグリ	10/27 3 久居市小造町	12/21 16 三雲町笠松

しかし、稲刈が終了すると姿を消す。三重県では留鳥とされているが、筆者の2年間の浅い経験では、この地方では季節移動中の個体が繁殖するらしい？

つまり夏鳥の範疇に入る。8月22日、三雲町の休耕田で6♂2♀を観察した。一妻多夫なので♂が多い。冬季のタマシギを見つける難題が残った。

ケリは、三雲町では繁殖期に50～60羽程見られ、8月の酷暑の日中は、水を張った休耕田で群を形成して水浴する。増殖した幼鳥、季節移動して来た個体が合流し、8月15日には最多の209羽をカウントした。

秋期～冬期は、海辺より山裾の方面に移動し、三雲町でのカウント数は常時40～50羽程度であった。

ホウロクシギは9月上旬になると、10羽以上のカウントが可能となるが、ダイシャクシギの秋期の飛来数は少ない。9月3日、雲出川河口での2羽と9月5日金剛川での2羽の観察が全てであった。

ホウロクシギに比し、ダイシャクシギは当地で極めて飛来数の少ないシギである事が判明した。

この報告のハイライトはオオキアシシギである。  
8月2日、雲出川河口よりキアシ、アオアシをカウントしつつ上流へ向かって行くと、河口より2km地点の三雲町大字星合字岡田の中洲にて、初めて見る珍しいシギがいると動物的本能で直感した。

脚が鮮黄色で長く、アオアシよりやや大きく、記録写真を撮り続けて接近を待たしたが、潮が満ち中洲が小さくなるとアオアシの群と共に飛び去った。

飛び去る姿には、アオアシの様に背中にはっきりと食い込む白色は無くオオキアシであると確信できた。

汐川干潟に2年続けて飛来したオオキアシの様な近距離の立派な写真は撮れなかったが、1964年8月3日仙台市蒲生での日本初のオオキアシ夏羽に似た写真が撮れたので、本部研究センターに報告した処「オオキアシの可能性は大きい、今回は参考記録」との事。

山階鳥類研究所に同定を依頼した結果、オオキアシシギであるとの丁寧なお返事を頂戴した。

オオキアシシギは、北米大陸では普通のシギなので、PAULSON著「Shorebirds of the Pacific Northwest」1993年に、詳細な識別方法が記載されている。

筆者は、最近この洋書を手に入れて熟読し、オオキアシシギであったとの確信を更に深めた。

1996年春の★シベリアオオハシシギに続いて、三重県初記録の大群シギと思われる。

春に比し、秋のエリマキシギの飛来は多かった。

9月3日より7日まで三雲町五主の刈田で★1♂、9月8日松阪市高須町の刈田で★1♂5♀の群、12月13日より15日まで三雲町曾原の養魚池にて☆エリマキシギ♂1が滞在した。

★エリマキ♀は、今回初めての観察経験であったが、♂より遥かに小さく、腹部が赤い個体も見られた。

コアアシシギも秋の飛来は多かった。三雲町曾原、一志町高野の水を張った休耕田では、1～2羽ずつ飛来し、一週間ほど栄養補給を行って飛び去った。

三雲町曾原の養魚池では、11月14日3羽の群、12月13日より15日まで☆4羽の群が滞在し前記したエリマキ♂と共に行動していた。

昨冬と同様、越冬する個体がでるかも知れない。

春と秋の飛来個体数差の最も大きなシギは、ツルシギであった。春の飛来は多いシギだが、昨秋は1羽、今秋は残念ながら1羽も観察出来なかった。

アカアシシギも観察できないシギである。春も秋も見られない。最近の2年間の観察により、当地においては極めて希有なシギである事を知った。

9月8日、金剛川の川岸にて休息する46羽のオバシギと9羽のコオバシギを近距離で記録撮影できた。

12月3日、五主海岸において、☆オバシギ夏羽1羽がダイゼン13の群の中に見られた。

最終観察日にもいたので、このまま越冬し越冬するものと思われる。

未だ夏羽であると考えより、すでに夏羽になっていると考えた方が妥当だろうか？

カモ類、カワウは、生殖羽の日立つ季節であるが、この時期にシギ・チドリ類の夏羽の観察例はあるのだろうか？既に、ケリは大声で鳴き叫び、頭を下げ脚を伸展させ、恋のディスプレイを開始している。

今秋は、★オジロトウネンがヒバリシギと同数の頻度で見られ、ウズラシギ、キリアイの方がむしろ珍しいと感じた。淡水性のシギ・チドリは、水を張った休耕田の有無により、その飛来数が大きく左右される。

長距離移動の途中、栄養補給に立ち寄りシギ・チドリ類が、安心して休息できる淡水湿地の確保の必要性を痛感した。昨夏は三雲町五主と星合に、今夏は南曾原に素晴らしい湿地が存在した。

アカエリヒレアシシギは1羽ずつではあったが、五主海岸、曾原の休耕田、金剛川で観察できた。

昨秋観察できて、今秋は見られなかった種は、ツバメチドリとアメリカウズラシギの2種であった。

9月29日、★ミヤコドリ2羽が雲出川河口に戻って来た。10月27日より★3羽に増え、11月9日より☆4羽となったが、越冬した4羽の内、下嘴先端破損の個体と左肩変形の個体は飛来しなかった。

したがって、少なくとも2羽は新しく飛来した個体である。成鳥1羽、若鳥3羽と判断した。

ミヤコドリの寿命は36年といわれている。

この4羽は若いので、今後の飛来が楽しみであったが、12月15日1羽の腹部より外傷性出血を見た。

近くで、右肩負傷のユリカモメ1羽も見られた。

恐らく当日早朝、船上より発砲されたカモ猟の流れ弾を受けたものと思われた。

当時、雲出川河口、五主海岸沖に群を形成していたカモ類が、当日は1羽として見られなかった。

☆腹部出血のミヤコドリ発見後は、予想通り3羽に減った。落鳥したものと考え、毎日の様に海岸線を隈無く調べたが、死骸は発見できなかった。

12月21日、雲出川河口に近い海で、船上より数名のハンターが海上の何物かに連射していた。

フィールドスコープの倍率を最大限にして見たが、遠すぎて的は不明であったが、ハンター達はそれを回収する事なく急いで去った。しかるに、それがミヤコドリの死骸である可能性は残された。

稿を終えるにあたり、毎月の観察記録に対するコメントと本誌への投稿をお薦め戴く本支部顧問の橋本太郎先生並びに内陸部の素晴らしい湿地をご教示戴いた高橋松人副支部長に深謝します。

★本部研究センターにて公式記録に登録の種

☆本部研究センターへの報告済みの種

※山階鳥類研究所にて同定して戴いた種

○バードウォッチング入門③スズメのお宿（津駅東口）

- ・日 時：1996年9月21日（土）16:00～18:00 晴
- ・担 当：橋本祐子
- ・参加者：5名 観察種：9種

[参加者の感想]

- ・数の多さにびっくりした。
- ・スズメのねぐらの場所にびっくりした。
- ・ビルに集まってからおりてくるところがおもしろかった。
- ・去年より多く感じた。一年のくらしについて知っておもしろかった。

○多度峡探鳥会（桑名郡多度町多度）

- ・日 時：1996年11月10日（日）9:00～12:00 晴
- ・担 当：藤田克三、近藤義孝
- ・参加者：3名 観察種：17種

秋も深まり、多度峡も、探鳥会としては初めて観察された鳥もいれば、毎年観察される鳥と、冬を控え少しずつですが多く見られるようです。それと今年は、ヤマガラやシジュウカラ等の小鳥達が早くから庭先でも見られるようです。（藤田）

○局ヶ岳探鳥会（飯南郡飯高町宮前）

- ・日 時：1996年11月10日（日）10:00～13:30 晴
- ・担 当：西村四郎、中村洋子
- ・参加者：18名 観察種：17種

○亀山水曜探鳥会（亀山市亀山公園）

- ・日 時：1996年11月13日（水）9:20～11:35 晴
- ・担 当：橋原 泰
- ・参加者：19名 観察種：29種

- 1 マヒワの群をゆっくりと観察できた。アキノノゲシの種を一生懸命食べていて我々は無視された。
- 2 今日のテーマ「混群の観察」は最後になって達成できた。ほぼ真上を見続けたので、「ああ、首が痛い」と異口同音。
- 3 今日から全員委員名札を付けることにした。

○ひもろぎの里探鳥会（伊勢市勢田町）

- ・日 時：1996年11月14日（木）9:10～12:00 晴
- ・担 当：吉居瑞穂、林 淳子
- ・参加者：13名 観察種：22種

蓮台寺奥の山田の風景はいつ見てもいいものです。この環境いつまで守られるのかと気になります。風景は変わらなくても出会う鳥が最近とても減っているよ

うに思います。（吉居）

[参加者の感想]

伊勢自動車道西インター付近に鳥が多く、山に入ると鳥の種類も数も少ないように思いました。なぜでしょう？

○バードウォッチング入門④鳥と環境（津市安濃川河口）

- ・日 時：1996年11月16日（土）9:30～12:00 晴
- ・担 当：橋本祐子
- ・参加者：6名 観察種：31種

5～6ヶ所のポイントで立ち止まってウォッチングする方式で行った。環境と鳥のテーマであったが、初心者にあわせて「どこにいたか？」を観察してもらった。

○県民の森探鳥会（三重郡菰野町千草）

- ・日 時：1996年11月22日（金）9:30～12:00 曇
- ・担 当：矢田栄史、尾畑玲子
- ・参加者：15名 観察種：17種

曇り空、無風、この時期にしては暖かい日でした。カラ類の混群を間近で見れると思っていましたが、ヤマガラの小群を1回と、エナガとメジロの混群を見たとどまりました。他の野鳥たちも声はするのですが姿は確認できず、じっくりと見るという場面はほとんどありませんでした。しかし、ゆったりとした気分が森の中を歩いていただけたようです。（矢田）

[参加者の感想]

3年ほど前から一人でバードウォッチングをしていますが、鳥の姿は見ても、種名がわかるまでかなりの時間がかかったりします。今日参加してみて、鳴声で種類がわかってよかったです。

（初めて探鳥会に参加された方）

○五十鈴公園探鳥会（伊勢市宇治浦田町）

- ・日 時：1996年12月1日（日）9:30～12:00 晴
- ・担 当：今村 禎、林 淳子
- ・参加者：21名 観察種：33種

きれいに色づいた木々の枝先にカラ類の群、カワセミ、ミサゴ、ノスリ、ハイタカ、イカルチドリ等の群と、冷たい風を除けば見どころいっぱい探鳥会でした。

（今村）

○中央緑地探鳥会（四日市市日永）

- ・日 時：1996年12月4日（水）10:00～12:00 快晴
- ・担 当：尾畑玲子、波田徹三
- ・参加者：20名 観察種：26種

昨年は冬鳥が全国的に不作(!)で、種類も少なかったが、今年は鳥も参加者も多種多様でうれしい悲鳴。まる1日公園内を歩き回っていても退屈しそうにない会となりました。(尾畑)

[参加者の感想]

- ・山に行かなければ見られないだろうと思っていた鳥がこんな身近で見られるとは思わなかった。また来たい。
- ・望遠鏡でのぞかせてもらって、鳥の胸が意外にふっくらと厚みがあることを発見。生きているものの温かさを感じることができた。

○亀山1金探鳥会(亀山市椿世町)

・日 時: 1996年12月6日(金) 9:00~12:30 晴

・担 当: 楢原 葵

・参加者: 13名 観察種: 35種

表題の「ルリビタキを探す」は裏切られた。目的としたところにオオタカやノスリがいたためか、他の鳥も鳴かず、少し離れた所にカケスやツグミが少数いた。

[参加者の感想]

- ・はじめて見る鳥が多かった。
- ・いい所で、他ではなかなか見られない。
- ・ノスリやオオタカを見られてよかった。
- ・キツネをゆっくり見られてよかった。

○多度峡探鳥会(桑名郡多度町多度)

・日 時: 1996年12月8日(日) 9:00~12:00

曇時々曇

・担 当: 藤田克三

・参加者: 9名 観察種: 26種

今年、小鳥達が多いように思います。いろんな理由があると思いますが、よく観察したいと思います。

多度峡探鳥会で初めてミヤマホオジロ(3羽) 見ることができました。うん、居るもんですね。

○亀山水曜探鳥会(亀山市亀山公園)

・日 時: 1996年12月11日(水) 9:20~12:20 晴

・担 当: 楢原 葵、伊藤多紀子

・参加者: 17名 観察種: 31種

「鳥と木の実」というテーマだったが、鳥が実を食べているところは観察できなかった。

[参加者の感想]

今回も新しい鳥が見られてうれしい。

○神路ダム探鳥会(志摩郡磯部町恵利原)

・日 時: 1996年12月12日(木) 9:00~12:00 晴

・担 当: 中村みつ子、松本恵理子

・参加者: 15名 観察種: 24種

50~60羽の群になって飛び立つオシドリが、右から左から折り重なって、右へ左へ飛び回るその様子はまさにオシドリの乱舞。羽音まで聞き取れる近さで目の前を飛び回り、そして水面にすべり降りる。参加者一同歓声の連呼でした。私たちに驚いたのか、上空を飛び回るトビ、ノスリに驚いたのか?

水面に浮かぶオシドリは素晴らしい衣装で私たちを楽しませてくれました。

とても暖かい一日。初めての方にも楽しんでいただき、お目当てのオシドリは沢山観察でき、まずまずの探鳥会だったと思う。神路ダムも釣り人の進入防止のフェンスが巡らされており、鳥を見るには不都合でした。(中村)

[参加者の感想]

- ・初めてオシドリを観たけどこんなにキレイだとは!
- ・オシドリの羽の色は何色でしょう?
- ・疲れた。オンブしてほしい。(……誰でしょう?)

○木曾岬探鳥会(木曾岬・鍋田干拓地)

・日 時: 1996年12月22日(日) 9:00~12:00 晴

・担 当: 橋本祐子

・参加者: 55名 観察種: 46種

愛知県野鳥保護連絡協議会との合同探鳥会で、リーダーは森井豊久、浅沼秀夫、樺山勝己の各氏。

木曾岬干拓地の干拓前の話など聞いて有意義であった。伊勢湾の干潟の消失に改めて考えさせられた。藤前干潟がんばれ。大勢参加下さってありがとう!

○安濃ダム・横山池探鳥会(安芸郡芸濃町)

・日 時: 1996年12月23日(日) 曇時々雪

・担 当: 平井正志

・参加者: 11名 観察種: 11種

当日は風が強く、平野部でも雪のちらつくあいにくの天気であった。何名かはこの天候で参加をみあわせたようである。安濃ダムの展望台に集合し、右岸の駐車場に移動してオシドリを見た。オシドリは例によってあまり水面に出てこなかったが、じっくりと見ることができた。その後芸濃町椋本の横山池に移動したが、ここではカモ類が飛び立った後で、コガモに混じってカワアイサが飛び去るのが見られたのみであった。数日前に観察されたホオジロガモやタゲリは見られなかった。

○ニツ池探鳥会（伊勢市黒瀬町）

- ・日 時：1997年1月9日（木）9:10～11:00 晴
- ・担 当：林 淳子
- ・参加者：7名 観察種：30種

8種類のカモ達それぞれの特徴をじっくり観察することができた。カワウの数が去年は80+だったのが、今年250+になり周りの木々は真っ白。もう小枝をくわえて繁殖準備に入っているのもあり、今後の継続観察が必要。

○亀山1金探鳥会（亀山市椿世町）

- ・日 時：1997年1月10日（金）9:00～12:00 晴
- ・担 当：橋原 稔
- ・参加者： 観察種：28種

「混群」は見られなかった。ホオジロのいる環境と、モズのなわばり（冬のなわばり）を話す。

[参加者の感想]

- ・今回も初めての鳥を2種見られてうれしい。
- ・亀山は鳥の種が多い。

○神社の森と野鳥（伊勢市外宮勾玉池）

- ・日 時：1997年1月11日（土）13:00～14:30
- ・担 当：小坂里香、吉居瑞穂
- ・参加者：12名 観察種：19種

顕著な変化～ユリカモメが今年に入ってから多数見られるようになった。近くの川沿いに内陸に進出してきたらしい。観光客がパンくずを与えていた。今後池の生態系にどう影響を及ぼしていくのか関心をひくところです。

比較的暖かい日だったのでコガモの求愛ディスプレイがよく見られました。（小坂）

○多度川探鳥会（桑名郡多度町香取）

- ・日 時：1997年1月12日（日）9:00～12:30 晴
- ・担 当：藤田克三、近藤義孝
- ・参加者：8名 観察種：37種

今回の多度峡探鳥会を冬場だけ多度川と揖斐川合流点に移して行きました。（雪が降るとなかなか融けないため）

揖斐川のアシ原ではオオジュリン、ツリスガラが見られたほか、ノスリやハイイロチュウヒ早が見られたほか多数の野鳥も観察され、集合場所の多度大社駐車場ではイカルが60羽も見られた。木曾三川の木曾川ではコハクチョウ15羽が渡ってきているようです。（揖斐川にも来てもらいたいのですが。）（藤田）

○阪内川探鳥会（松阪市内五曲町）

- ・日 時：1997年1月18日（土）9:30～12:00 晴
- ・担 当：宮田たつ、中村洋子
- ・参加者：18名 観察種：31種

初めての参加者もよく鳥が見れて楽しんでもらえたと思う。（宮田）

[参加者の感想]

多種類の鳥が見られてよかった。

○シャックリ川探鳥会（名張市桔梗ヶ丘）

- ・日 時：1997年1月19日（日）10:00～12:30
- ・担 当：武田恵世、山中久次、塗矢博一
- ・参加者：23名 観察種：27種

小学校へ集まった時の注意事項で危ないことをしないよう言ったが、やかましくリーダーより先に進んでいったので鳥が逃げてしまったので少し観察がやりにくかった。（塗矢）

[参加者の感想]

- ・小学生が多くその親も来てくれました。とても楽しくこんな近くに多くの鳥を見られてうれしかった。
- ・ベニマシコが多かった。

○亀山水曜探鳥会（亀山市亀山公園）

- ・日 時：1997年1月22日（水）9:20～11:30 大雪
- ・担 当：伊藤多紀子
- ・参加者：1名 観察種：22種

雪の日には雪の中 歩くのもよし 雪の上を忍び足で歩く キュキュと靴がなる アオバトが飛び立ってしまった ジョウビタキが軒下で羽根を休めている（人懐こい顔で）また同じ場所でシロハラが虫をさがしていた。（お腹がすいていたのか）

ジョウビタキ軒下借りて雪宿り

○南部丘陵公園探鳥会（四日市市泊村）

- ・日 時：1997年1月24日（金）10:00～12:00 小雨
- ・担 当：高 和義、奥井健夫
- ・参加者：8名 観察種：15種

小雨の中、傘をさしての探鳥会となった。下見の際に観察したミヤマホオジロも現れず残念であった。そんな中でも3羽のカケスの飛ぶのが見られ、腰の白色が印象に残った。（高）

[参加者の感想]

天気予報どおり集合時間頃より雨が降り始め、加えて二日前に降り積った残雪を踏みしめて、正に寒中探鳥会でした。鳥たちも雨宿りの為か数が少ないようで



したが、初心者の私はアオジを初めてそれも多数ゆっくりと観察でき嬉しく思いました。カケスの大きな鳴声やシロハラが落葉をかきわけて餌をさがす様子等楽しむことができ、足元から冷えよる寒さと共に印象深い探鳥会でした。(杉野幸子さん)

○安濃川河口探鳥会 (津市安濃川河口)

- ・日 時：1997年1月26日 (日) 晴
- ・担 当：橋本富三
- ・参加者：19名 観察種：39種

観察の途中で時間をかけすぎたのでメインの河口での観察時間があまりとれなかった。次回から時間配分にも気を配りたい。

風が強く寒い日であったが、参加者が多かったためか観察された種類も近年では最多の39種となった。

[参加者の感想]

- ・身近にこんなに沢山の鳥がいるのに驚いた。(はじめての参加者)
- ・ゴイサギをすぐ近くで観察したが、白く長い冠羽が美しく印象的であった。



支部活動から

下水道施設建設について県に申し入れ

支部では、県が計画している中勢沿岸流域下水道(志登茂川処理区)浄化センターの建設工事について、シロチドリの繁殖を阻害しないよう、次の通り申し入れを行いました。これは理事会の決定によるもので、去る1月27日支部長名で県土木部長に郵送しました。

河芸町から津市白塚町にまたがる地域に建設が計画されている浄化センター予定地付近の海岸では、以前から三重県の鳥であるシロチドリが繁殖しており、1996年も繁殖が確認されました。

建設予定地付近の海岸(白塚町内、海岸グラウンドの海側)では、5月12日に1巢の営巣が確認され、6月1日まで抱卵を続け、6月8日には1羽のヒナの孵化が確認されました。また、6月15日には別の1巢が確認され、23日まで抱卵が続けられましたが、30日には消滅していました。これは抱卵期間から考えて、失敗したものと判断されます。現場には轍が多く見られ、原因は恐らく、海岸に侵入した四輪駆動車による踏みつぶしと考えられます。

浄化センター建設作業に伴う取り付け道路予定地の河芸町側海岸では5月12日に2羽のシロチドリのヒナが確認され、このヒナは少なくとも29日までは順調に成長しました。その後は親鳥と区別が付きにくいので確認できませんが、飛べるまで成長したものと推測されます。6月15日には別の1巢が確認されましたが、30日には消滅していました。恐らく失敗したものと推測されます。原因は不明です。

シロチドリは以前は海岸部で数多く生息し、繁殖していたと推定されますが、1996年繁殖期の調査では、河芸町田中川から津市志登茂川までの比較的良好な環境を持つ自然海岸では20巢が確認され、そのうち5巢で合計9羽のヒナが孵化しました。またこれとは別にヒナが観察されたのは、6巢に由来すると推定される14羽です。したがって確認されたヒナは23羽のみです。本年の調査はほぼ週に1回以上の割合で観察しましたので、観察漏れはごく少なく、あっても数羽程度と思われる。

また、桶町の吉崎海岸では少なくとも14巢が確認され、ヒナも確認されています。

これらの結果は、県下で良好な環境の自然海岸での結果であり、これ以外の地区での自然海岸での繁殖はごく少ないと思われます。

しかし、近年のアウトドアブーム、四輪駆動車の普及による海岸への車の進入で、シロチドリの繁殖環境は年々悪化してきているのが現状です。

したがって、浄化センター予定地及び仮説道路予定地付近の海岸は、シロチドリの貴重な繁殖地と言わざるを得ません。浄化センター建設地そのものは海岸の奥であり、シロチドリの繁殖に直接利用される可能性は低いと考えられますが、以下の2点については配慮すべきであります。

- 1) 建設に伴う工事はシロチドリの繁殖を阻害する要因になり得ること  
シロチドリの繁殖には、約1ヵ月連続して地上で安全に抱卵することが必要である。人や車の頻繁な侵入、接近は抱卵を放棄させてしまう。建設地に隣接する海岸部を作業場や資材置き場、駐車場などに利用しないこと。繁殖の妨げにならないようできる限り、静かな海岸環境を保つよう配慮すべきである。
- 2) 仮説道路の海岸部への設置は繁殖環境を著しく悪化させること、そして、工事が終了しても、良好な自然海岸とシロチドリの繁殖地が回復する保証はどこにもないこと  
仮説道路については、シロチドリの繁殖地である海岸部を通る計画を撤回し、代替案を検討すべきである。

## 事務局より

★会費納入を預金からの自動引落しで行いたい方や、特別会員になってもいいなと思っただけの方には運営事務局までご連絡下さい。( 木村京子方 Tel 815-233-1111 )

★引越しのシーズンです。住所が変わるときは、できるだけ早く三重県支部運営事務局か、本部会員センターまでご連絡ください。転居先不明で戻されてくる郵便が時々あります。

★4月には三重県支部総会を開きます。ぜひご出席ください。後日ご案内をお送りします。

◆スバゲッターやうどんなどの麺類のゆで汁、お米の研ぎ汁、そのまま捨てていませんか。これらの汁を庭木の根元にまくと植物の栄養になるほか、捨てずにとっておいて洗剤の代わりに使うと、食器がきれいに洗えます。一度試してみてください。(木村京子)

## 募金をOBICへ送付しました

先日伊勢市で支部交流会を行いました。その会場に日本海での重油汚染で被害を受けている海鳥を保護しようと募金箱を置いたところ、2,230円のご寄付をいただきました。

早速、OBIC(油汚染海鳥被害委員会～事務局：日本野鳥の会)へ送金しました。

ご協力ありがとうございました。

(事業担当・西村 泉)



## 編集後記

☆この3月から4月の話題は何といってもヘル・ボツ彗星です。4月1日には太陽に最接近しその時の光度は一2等級になると予想されています。はたして昨年(1996年)の百武彗星のように素晴らしい尾が見られるでしょうか。北西の空、アンドロメダ座とカシオペア座の間を東へ移動していきますので、皆様お見逃しなく。☆今号はたくさんさんの原稿をお寄せいただきました。特集についても多くの方に協力をしていただき感謝しています。☆所々に入れている野鳥情報風カットは西村泉さんによるものです。ありがとうございます。☆1995年5月の第9号から2年間支部報の編集を担当して来ましたが、4月の総会で役員改選となりましたのでこの号をもって編集の役目を終えることとなりました。この間皆様には多大のご支援ご協力を賜り本当にありがとうございます。今後とも「しろちどり」をみんなの支部報としてご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。なお、次号の原稿はとりあえず世古口迄お送り下さい。(せ)

## おわび

この第16号は2月中にお届けする予定でしたが編集部の手際により発行が遅れてしまいました。

誠に申しわけなく心からおわび申し上げます。

しろちどり第16号 1997年2月発行

表紙絵 平井正志 題字 濱田 稔

編集 世古口有司

TEL

発行者 財団法人日本野鳥の会三重県支部

〒516 伊勢市宇治浦田2丁目9-4 杉浦邦彦方

TEL

印刷 箱 印刷 〒510-13 三重郡菟野町田口1903-3